

シナリオ：模擬裁判「竹取物語」

監修 鈴木 博 康

シナリオ作成 2021年度専門演習A・B ゼミ生

コロナ禍（COVID-19）の収束に向けワクチン接種への期待が寄せられるものの、依然として日本の大学教育においては、遠隔授業と対面授業とが混在し、本学においても2021年度は、年度始めから各科目の属性に応じて、一部対面、一部遠隔（同時双方向ないしはオンデマンドによる）の形式で授業が進行した。本年度は、昨年実施できなかった夏のオープンキャンパスでの模擬裁判¹企画については、例年と比べ大きく制限はあったものの、一応は実施することができた²。

本学にあつては、学期当初、演習授業は対面で行うこととされていたが、学期途中で国の緊急事態宣言の発令に伴い、5月から6月にかけての宣言期間中は遠隔授業³に切り替えられるなど、やはり例年のような完全な対面授業として実施できたわけではない。しかし、教員はもちろん学生においても遠隔によるゼミの実施方法（同時双方向）につき1年分の経験・蓄積があることで、初年度に比べれば、それなりの改善が進んだせいか、シナリオ作りもなんとか

1 過去の模擬裁判については、拙稿・本誌25巻1・2号合併号およびそれ以降の各号所収を参照。

2 例年であれば、法廷教室には他の教室からも傍聴席として椅子を運び入れ、それでも不足するため、見学者には立ち見をお願いせざるを得ない状況であったが、今回はむしろ、普段の法廷教室の座席数を減らして対応することとなった（なお、末尾の写真資料も参照。）。傍聴券の抽選・交付こそしないものの、大幅に入場者数を制限した。そのため、模擬裁判は同一内容で、午前と午後とに分け、2度実施することとなった（なお、当日は、高校生1人につき同伴者1名までのオープンキャンパスへの参加が認められていた関係で、相当数の保護者等の参加もあった。しかし、法廷教室には高校生だけの入場とし、保護者等には別教室で遠隔会議システムを用いてリモート配信のライブ中継で模擬裁判の様子を見学してもらうこととなった。）。学生にあつては、例年ならば1回だけの公演であったところ今回は2回となり、当日の待機時間も含めて長丁場になったが、快く応じてくれた。記して感謝したい。

3 春学期15回中6回が遠隔となった。

オープンキャンパスの「納期」には間に合わせる事ができた。

今年の本学のオープンキャンパスは密の回避のため、入場者を分け、8月7日土曜日の午前と午後それぞれ同一内容で実施することとなり、模擬裁判も同様であった。また、2021年度春学期の定期試験は、8月2日から7日の間、学内の全科目が遠隔で実施されることとなった。これには、例年のように対面による定期試験日程を予定していた場合でも、感染状況によっては急遽遠隔に切り替えざるを得なくなる可能性があるほか、今学期は授業形式につき対面と遠隔とが混在していた関係で、定期試験も授業形式に準じるとした場合には、一日の間に、両方の形式の試験を受験する学生が出ることが予想され、実施上の困難が予想される、といったことが主たる理由であった。実際には、多くは期間中の定期試験に代えてレポート提出に振り替えられていたようであるが、いずれにしても、学生にとっては今年もやはり落ち着いた中でのオープンキャンパスの披露となった。

今回は、竹取物語を題材に模擬裁判を展開した。既存の物語をもとにこれを刑事裁判化していくという方法は従来通りであるが、これまでに扱ってきた昔話などに比べると登場人物も多く、また原作は物語が長く、展開も豊かである⁴。人物や事物設定なども詳細であるから、自分たちで改めて設定することはあまりなかったものの、長めの物語の中でどの部分を切り取ってくるかということはそれなりに検討を要した。もっとも、これまでそうであったように、当該物語の象徴的な部分を用いるという点では同様であった。

今回は、原作の冒頭部分、すなわち被害者かぐや姫が被告人竹取の翁によって竹藪から連れ去られたとする拐取罪がテーマである。そして、原作では、5人の貴公子からの求婚が描かれているところ、学生たちはここについても、翁が当初から貴族との姻戚関係を結ぶべく、かぐや姫を結婚させるつもりで連れ

4 余談だが、学生ならではの遊び心とでも言おうか、今回のシナリオ中には、原作から借りていわば本歌取りを意識させるかのごとくストーリー展開する箇所が随所ちりばめられた。

去ったのではないかと、単純拐取ではなく、より重い営利目的等拐取として展開しようと試みた⁵。

拐取罪の法益については、とくに連れ去られる被害者が未成年者である場合に、保護監督者の権利侵害ということもまた議論となるが、学生たちは、原作において、翁が竹藪でかぐや姫のみならず、黄金の入った竹をも発見していることに着目し、原作を脚色の上、この黄金（小判）は監護者から翁に対してかぐや姫の養育費として託されたものである、という可能性を創作した。すなわち、保護監督者から翁に対するかぐや姫の地上での養育の依頼があったのであれば、拐取が成立することはないのではないか、という理解である。したがって今回の公訴事実としては、拐取罪のほか、遺失物等横領が挙げられ、これらの成否が問われている。

そして、学生たちの裁判における争点化のための苦心は、当該小判が遺失物ではなく、月の世界の者から託されたものである、という側面を押し出すところにあるから、いかに人為的・作画的に置かれていたものであるか、というところを強調しようとしている。原作のエピソードから、かぐや姫の拐取と小判の横領を公訴事実として作り上げるものの、両罪の成否の議論がまた、はたして被告人翁が月の世界の者からかぐや姫の養育者として選ばれし存在だったのか、という議論とパラレルに展開されるのである（対して検察官は、竹藪の小判は被告人の家屋敷の造作や宴会費用として費消されたと立証しようとする。）。

ところで、例えば当職が講義科目たる刑法各論の授業で拐取罪を取り扱う單元でしばしば経験することに、刑法が元来予定していた拐取罪の形態と、学生がイメージする拐取罪の形態が大きく異なっているという問題がある。すなわ

5 このほか、かぐや姫が原作の中では、発見時は3寸ばかりであったが、たちまち成人？している（実は年齢が定かではない。）など、フィクションとは言え、扱いに困る部分もあったが、そもそも月の世界での時間と地球上の時間はどうやら進み方が違うというのが原作の中での設定であるから、模擬裁判の展開にあっても、深入りすることは避けた。

ち、学生が拐取と聞いてすぐ思い浮かべる犯罪形態のイメージとしては、ドラマなどの影響の故か、身代金目的拐取が一般的である。この条文自体が法改正によって事後⁶⁾に追加されているわけであるが、これに対して、日本の古くからの拐取罪は人さらいや人買いなど、管理労働（やそれを通じたピンハネ）に典型なように、連れ去られる被害者からの搾取を期待してなされる犯罪形態を想定していたからである⁷⁾。

こうした拐取罪の基本形態と学生のイメージとのいわば乖離は、行為者と被害者の関係の把握イメージにも影響する。多くの学生にとっての拐取罪とは身代金目的拐取のことであるから、連れ去る行為者と連れ去られる被害者は「利害対立的」な関係で把握され、文字通り、「加害者」と「被害者」として理解されることとなる⁸⁾。しかし、社会現実として拐取罪には、利害対立的な関係とは限らなくても、拐取罪として捕捉されるものがある。すなわち、(場合によっては祖父母も関わりながら) 連れ去られる乳幼児の親権・監護権をめぐる争いとして生じる、両親の離婚ないしはそれが間近い別居状況下での父と母との間で、その子どもの引き渡しトラブルが拐取罪として刑事事件になり得るというのがその例である。法域としては本来は家族法で解決されるべき子どもの監護権問題が、刑法上は拐取罪として捕捉されているという現実も起こり得るのだ、ということが、学生のような拐取罪＝身代金目的拐取という理解・イメージを持つ場合にはおよそ及びもしない事態、という訳である。実の親（とは限らず養親も同様であるが）が連れ去る行為者となり、その者と連れ去られる実子とは、身代金目的拐取のような利害対立的な関係であるという、これまでの学生のステレオタイプの理解では到底とらえきれない犯罪現象として現れてくる⁹⁾こととなる。

6 昭和39年法律第124号。

7 さらにまた、年齢によっては児童労働による搾取を期待した犯罪となる。

8 身代金目的拐取であれば、「加害」行為者はまさに憂慮する者の憂慮に乗じるわけである。

9 したがって、各論の授業を受けての学生の感想には「こんなものまでもが拐取罪になるのか」という驚きの反応が多く寄せられることになる。

さらに、社会現実と学生のイメージの乖離ということについては、語弊を承知で言えば、被害者の承諾、すなわち連れ去られる被害者自身が連れ去られることを（意思形成の瑕疵はあり得るものの）望んでいるということもある、ということも指摘する必要がある¹⁰。昨今ではしばしばSNS上でもみられるが、援助交際、パパ（ママ）活、神待ち、といったことである。連れ去られる被害者少年からすれば、虐待を受けたり、居場所がなかったりなどの家庭環境に恵まれず、（一時的な）避難場所・居場所を求めての行動のように、連れ去る加害者とは必ずしも利害対立的ではなく、表面的に、ではあろうが、むしろ、利害一致的な win - win の関係にすらなる。さらにこれに関連して、条例レベルではあるが、各地の青少年育成条例¹¹に見られるいわゆる深夜同伴罪も、拐取罪の隣接犯罪として指摘しておく必要があるだろう。これもまた、場合によっては連れ出される被害者少年の援助交際や家出の「願望」に対して「利害一致的に」連れ出す加害者が関与する側面があり得るからである。

このように、学生にとっては、当初抱いていたイメージとは大きく異なりうる拐取罪ではあるが、ゼミ生たちはこうした新たな「発見」「知識」についてもこれを機に彼らなりにシナリオに盛り込もうとしていた様子である。すなわち、翁のもとでどれほどにかぐや姫が大事に育てられていたのか、そして、かぐや姫自身もまたここまで育ててくれた「養親」への深い感謝の念をどれほどに抱いていたのか、さらには、そもそもかぐや姫が地上に来なければならなかったのはなぜなのか、このくだりは原作にあっても必ずしも定かではないが、こうした経緯についても思いを巡らせるに至るような展開の台本となった。

10 当然、ここには、176条等の性的自己決定同様、連れ去られる者のいわば同意能力・年齢にかかる議論設定がなされる必要もあることになるわけであるが。もちろん、そもそもこうした事象自体に社会的に問題がないということをここで言っているわけではない、念の為。

11 福岡県の青少年健全育成条例では、午後11時から翌日の午前4時までの間、青少年を連れ出した場合に、20万円以下の罰金又は科料の罰則が定められている（34条2項、38条5項14号）。

なお、今回は、例年行っていた高校生のフロアーからの法曹など各配役への参加はコロナの感染対策から募ることはしなかったほか、当日予定していたゼミ生の出演ができなくなるなどの事情もあり、配役には絶対的人数不足の状況となった。当日は、当初予定の配役やセリフについては急遽一部変更したうえで、高校生に披露している。ここで示すものはオープンキャンパス当日に実際に演じたシナリオではなく、事前に作成していた上演予定版であることをお断りしておく。(2021.8.10.記)

開廷、人定質問

被告人が弁護人とともに入廷し着席している（在宅事件）。やがて、裁判官が登場。

裁判長「それでは、被告人 竹取^{おきな}の翁 こと 讃岐^{みやづこ}の造 に対する営利目的等略取及び遺失物等横領被告事件の審理を始めます。被告人は、前に立ってください」

被告人、証言台の前に立つ。

裁判長「名前を何と言いますか」

被告人「本名は 讃岐^{みやづこ}の造 と言います」

裁判長「生年月日はいつですか」

被告人「770年7月7日です」（※竹・たけのこの日。1986年全日本竹産業連合会制定）

裁判長「仕事は何かしていますか」

被告人「竹細工職人です」

裁判長「本籍はどこですか」

被告人「京都府竹取市長岡^{たけとり ながおか}784番地 です」（※長岡京）

裁判長「住所はどこですか」

被告人「本籍と同じです」

起訴状朗読

裁判長「それでは検察官、起訴状を読んでもください。被告人はよく聞いていてください」

検察官、起訴状を朗読する。

黙秘権の告知、被告人・弁護人の陳述

裁判長「ここで被告人に注意しておくことがあります。被告人には黙秘権という権利があります。答えたくない質問には答えなくてかまいません。最初から最後までずっと黙っていることもできます。質問に答えても構いませんが、法廷で話をしたことは、あなたにとって有利な証拠にも不利な証拠にもなりますからよく考えて発言してください。ただし、黙秘というのは、黙っているということであって、積極的にうそを言うことが認められているわけではありません。わかりましたか」

被告人「はい」

裁判長「そこで質問しますが、先ほど検察官が読み上げた起訴状の内容はその通りで間違いないですか」

被告人「私が竹藪からかぐや姫を連れ帰り、また、その後3回にわたって小判を手に入れたことも認めます。しかし、私がかぐや姫を連れ帰ったのは、捨てられていたあの子を不憫^{ふびん}に思い、保護するためでした。結婚についてはいずれ死にゆく私たちのもとにいるより、どこかの家に嫁いでいった方があの子が幸せになると思ったから勧めただけです。見つけた小判も、何らかの理

由で捨てざるを得なかったあの子の両親からの養育費だと思い、彼女の養育以外にその小判を使ったことはありません」

裁判長「弁護人の意見はいかがですか」

弁護人「被告人の主張と同様です。日頃、竹藪に立ち入っていたのは被告人だけであり、そこからかぐや姫さんを連れ帰ったことは彼女の保護に他なりません。結婚についても、^{きんだち}公達からの求婚があっただけで、彼女に結婚を強要した事実はなく、ましてや保護時に結婚させることを目的としていたことなどもってのほかです。また、見つけた小判についても、彼女が遺棄されていた場所に定期的に3度も小判があったということから養育費以外に考えられず、この点についても争います。被告人は無罪です」

裁判長「被告人は席に戻ってください」

被告人、元の席に戻る。

冒頭陳述

裁判長「それでは検察官、冒頭陳述を行ってください」

検察官、冒頭陳述書を読み上げる。

裁判長「続いて、弁護人は弁論要旨を述べてください」

弁護人、弁論要旨を述べる。

証拠請求

裁判長「それでは検察官、証拠請求を行ってください」

検察官、証拠等関係カードに基づいて、説明を始める。

検察官「検察官が請求を行う証拠は、証拠等関係カード記載の各証拠です。

まず、検1号証は、被告人 讃岐^{みやつこ}の造^{たけとり}の 戸籍抄本 です。

検2号証は、竹取市長岡^{ながおか}161番地先の山中の竹藪付近の実況見分調書 です。

検3号証は、被告人宅及びその付近の実況見分調書 です。

検4号証は、静岡県^{しずまき}の山頂付近から採取した、不老不死とされる薬物の灰及びその鑑定書です。

検5号証は、証人として、車持皇子^{くらもちのみこ} さんです。

検6号証は、同じく証人として、中將高野^{ちゅうじょうたかののおおくに} さんをそれぞれ請求します。

車持さんは自身の求婚の際のかぐや姫の様子について、高野さんはかぐや姫が月へ帰る際の被告人の様子について、確認したいと思います」

裁判長「弁護人、何か意見はありますか」

弁護人「検1号証と2号証、4号証は同意します。しかし、3号証、5号証と6号証については、本件とは何ら関係がなく、予断を与えるものですから却下して下さい」

裁判長「すべて証拠採用します。弁護人からは何かありますか」

弁護人「弁護人からは、御室戸齋部^{みむろどのいむべのあきた}秋田 さんを証人として請求します」

裁判長「検察官、意見はありますか」

検察官「不同意です。必要性がありません」

裁判長「弁護人、秋田さん についての立証趣旨は何ですか」

弁護人「かぐや姫さんが月へ帰った後の様子のほか、被告人と彼女の関係について確認したいと思います」

裁判長「弁護人の請求する証人についても採用します」

証拠調べ

裁判長「それでは証拠調べに入ります」

検察官、各書面・証拠物を書記官に提出する。書記官は、それらを受け取り、裁判長に渡し、そのあと、書面の写しを弁護人にも渡す。各人、各証拠を確認する。

続いて検察官から証拠の説明がなされる。とくに、現場の実況見分調書によれば竹藪の当該場所であくや姫が発見されたこと、また小判もこの竹藪で発見されていること、自宅については本件後に家屋敷が立派になっていること、灰については成分分析した鑑定書によれば地球上の物質ではないこと。

裁判長「それでは、証人調べを行います。^{くらもち}車持さんは本日出廷していますか」

検察官「はい、出廷しています」

裁判長「それでは証人を呼んでください」

証人、車持皇子くらもちのみこ、刑務官とともに通路を通して法廷に入ってくる。※解錠のタイミング。

その後、証言台の前に近寄る。

突如、傍聴人が騒ぎ出す。以下のセリフの進行とともにやがて傍聴人が車持につかみかろうとして取り押さえられ外に連れ出される。

傍聴人（蓬萊の玉の枝の職人）「おい、^{くらもち}車持！」

裁判長「傍聴人は、静粛に願います」

傍聴人「お前、よくノコノコ出て来やがったな」

裁判長「傍聴人は、静かにしてください」

傍聴人「無視すんなよ」

裁判長「静かにしなさい」

傍聴人「おい、金払え」

裁判長「やめなさい、退廷を命じますよ」

傍聴人「お前のせいでうちの会社はつぶれそうになっているんだ、早く払え」

裁判長「静かにしなさい。席に戻りなさい」

傍聴人「あれ作るのにいくらかったと思っているんだ、この詐欺師」

裁判長「傍聴人に退廷を命じます。退廷しなさい」

傍聴人、取り押さえられて退廷する。

裁判長「(気を取り直して) 双方、証人、続けてよろしいでしょうか」

一同「はい」

裁判長「では、証人は証言台の前に立ってください。名前は何と言いますか」

証人 車持皇子「車持皇子くらのみこ です」

裁判長「生年月日は？」

車持「811年5月25日です」(※愛車の日)

裁判長「職業は？」

車持「今は無職です」

裁判長「今はどこに住んでいますか？」

車持「竹取市平野212番地 九州国際大学刑務所で服役中 です」

裁判長「それでは、これからあなたを証人として尋問しますが、その前にうそをつかないという宣誓をしていただきます。傍聴人も起立してください。その紙(＝宣誓書のこと)に書いてある文字を声に出して読んでください」

傍聴人が起立して見守る中、車持、宣誓する。宣誓が終わったら、裁判長は傍聴人を着席させる。

裁判長「証人は今、宣誓したとおりに正直に述べてください。うそをつくとか

なた自身が偽証罪として処罰されることになります。また、あなたには、自らに関して不利益なことを供述させられない権利があります。証言を求められた場合に、あなたは証言を拒否することができます。それでは検察官どうぞ」

検察官「まず、あなたは被告人及びかぐや姫さんとどのような関係ですか」

車持「私はかぐや姫さんに求婚していた5人のうちの一人で、婚約の条件として彼女から蓬萊の玉の枝を要求された者です。被告人については、彼女と同居しているのだから親なのだろうと当時は認識していました」

検察官「では、あなたが求婚しようと思った経緯を教えてください」

車持「はい。かぐや姫という容姿端麗な女性がいると噂に聞き、彼女の家に足しげく通っていたところ、ある日被告人が屋敷の中に通してくれたため、自分を認めてくれたのだと思い、彼女に求婚しました」

検察官「足しげく通っていたとのことですが、その間かぐや姫さんが自由に外出する姿を見たことはありますか」

車持「いいえ。彼女はいつも屋敷の中において、顔を見せることはありませんでした。そのこともあり、屋敷の中に通された時には、奥手な彼女が心を開いてくれたのだと舞い上がりプロポーズしました」

検察官「彼女はいつも屋敷の中にいたのですね」

車持「はい」

検察官「質問を変えます。あなたが求婚した時の彼女の様子を教えてください」

車持「私が求婚した際、彼女から蓬萊の玉の枝を要求されました。私含め5人が同時に求婚している状態だったので、そのうちの誰と結婚するか決めるための試練であって、彼女自身は結婚に前向きなものだと当時は思っていました」

検察官「当時は、ということは今は違うのですか」

車持「はい。今にして思うと、彼女は私たちと結婚したくないがために無理難題を押し付けていたのだと思います」

検察官「なぜそう思うのですか」

車持「私の場合、蓬莱の玉の枝を作らせた職人が代金未払いを訴えたため偽物だとされましたが、それなりによくできた模造品でした。それは他の方々の品もです。それにも関わらず、彼女はその品が本物であるかどうかについて最初から懐疑的でした」

検察官「なるほど。それで彼女ははじめから結婚をする意思がなかったのだと思っただけですね」

車持「ええ、彼女は私たちの贈り物が偽物であることを望んでいるようでした」

検察官「ありがとうございます。検察官からは以上です」

裁判長「それでは弁護人、反対尋問はありますか」

弁護人「あなたの認識では、かぐや姫さんは結婚を嫌がっていたと思うのですが、結婚の話を持ち掛けたのは被告人ですか」

車持「いいえ。屋敷に招いたのは被告人ですが、求婚自体は私が自発的にしました。他の方々もそうだと思います。ただ、求婚時、被告人は喜んでいるように見えましたし、かぐや姫さんに私たちとの結婚を勧めていたという話も聞きました」

弁護人「被告人から結婚を持ち掛けたわけではないのですね。もう1つ質問します。結婚について被告人はかぐや姫さんに強要している様子などはありませんでしたか」

車持「いいえ。確かに、かぐや姫さんが私たちからの求婚を断った際は残念そうにはしていましたが、結婚相手や結婚をするかどうかについては彼女の意思に委ねているようでした」

弁護人「以上です」

裁判長「では裁判所からお尋ねします。あなたは、かぐや姫さんが屋敷から顔を出すところを見たことがないと言いましたが、それは被告人の指示だったのでしょうか？」

車持「外出する姿を見たことはありませんが、外出を許されていなかったのか

とか、屋敷の中で自由がなかったのかについてまではわかりません」
裁判長「わかりました。では証人、お疲れ様でした。戻っていただいて結構です」

車持、法廷から通路を通して出ていく。※手錠のタイミング。

続いて、証人 中将高野大国ちゅうじょうたかののおおくに が出てくる。

裁判長「証人、証言台の前に立ってください。名前は何と言いますか」

証人 高野「中将高野大国ちゅうじょうたかののおおくに です」

裁判長「生年月日は？」

高野「819年11月1日です」

裁判長「職業は？」

高野「宮中警護の職についています」

裁判長「住所は？」

高野「京都市上京区御苑^{かみぎょう ぎょえん}5-9-1です」

裁判長「それでは、これからあなたを証人として尋問しますが、その前にうそをつかないという宣誓をしていただきます。傍聴人も起立してください。証人はその紙に書いてある文字を声に出して読んでください」

傍聴人が起立して見守る中、高野、宣誓する。宣誓が終わったら、裁判長は傍聴人を着席させる。

裁判長「証人は今、宣誓したとおりに正直に述べてください。うそをつくとなあなた自身が偽証罪として処罰されることになります。また、あなたには、自らに関して不利益なことを供述させられない権利があります。証言を求められた場合に、あなたは証言を拒否することができます。それでは検察官どうぞ」

検察官「かぐや姫さんが月に帰る当日、あなたは何をしていましたか？」

高野「兵の一団を率いて、被告人の家に向かいました」

検察官「目的は何ですか？」

高野「帝のご命令で、被告人の自宅を守る為に、です」

検察官「帝からは、かぐや姫さんを守る、というのではなくて 被告人の自宅を守る、ということを言われたのですか？」

高野「はい。帝は、かぐや姫さんを何者かが連れ帰る、ということまでご存じなかったのではないかと思います」

検察官「月の使者が来る前に被告人と何か話をしましたか」

高野「はい。被告人から、何としてもかぐや姫さんを月の使者に連れていかれないようにと懇願されました」

検察官「かぐや姫さんが連れていかれないようにと言ったのですね？」

高野「はい」

検察官「では、そのかぐや姫さんが連れていかれないようにするという使命は、果たせましたか？」

高野「いいえ、月の使者の不思議な力で戦うことすらできませんでした。戦おうにも体が全く動かなくなってしまったのです」

検察官「そんな中でかぐや姫さんは月に帰って行ったということですか？」

高野「はい、私も含めその場にいた全員が何もできず、ただ見ていただけでした」

検察官「その時の、被告人の様子はどうでしたか？」

高野「悲しそうでした」

検察官「ありがとうございました。検察官からは以上です」

裁判長「弁護人から何かありますか」

弁護人「月に帰るときのかぐや姫さんの様子で、何か変わったことはありませんでしたか？」

高野「はい、被告人に何か葉のようなものを渡していました。あとで知りまし

たが、不老不死の薬でした」

弁護人「その時のかぐや姫さんの表情は見えましたか？」

高野「はい、被告人と同じく悲しそうにしていました」

弁護人「弁護人からは以上です」

裁判長「裁判所からお聞きます。先ほどあなたは、他の人の表情について答えましたが、夜なのによく見えましたね？」

高野「満月の10倍くらいの明るさだったので、はっきり見えました。毛穴まで見えそうでした」

裁判長「あなたと、被告人やかぐや姫さんとの距離はどれくらい離れていましたか」

高野「10メートル程だったと思います」

裁判長「わかりました。証人は下がっていただいて結構です」

続いて、証人、御室戸齋部みむろどのいむべ の秋田 が出てくる。

裁判長「証人、証言台の前に立ってください。名前は何と言いますか」

証人 秋田「御室戸齋部みむろどのいむべ の秋田 です」

裁判長「生年月日は？」

秋田「776年3月14日です」

裁判長「職業は？」

秋田「宮中祭司です」

裁判長「住所は？」

秋田「京都府竹取市八幡1-6-1です」

裁判長「それでは、これからあなたを証人として尋問しますが、その前にうそをつかないという宣誓をしていただきます。傍聴人も起立してください。証人はその紙に書いてある文字を声に出して読んでください」

傍聴人が起立して見守る中、秋田、宣誓する。宣誓が終わったら、裁判長は傍聴人を着席させる。

裁判長「証人は今、宣誓したとおりに正直に述べてください。うそをつくとなた自身が偽証罪として処罰されることになります。また、あなたには、自らに関して不利益なことを供述させられない権利があります。証言を求められた場合に、あなたは証言を拒否することができます。それでは弁護人どうぞ」

弁護人「あなたと被告人はどういう関係ですか？」

秋田「古くからの付き合いで、かぐや姫さんの名付け親になってほしいと頼まれました」

弁護人「不老不死の薬はご存じですか？」

秋田「はい、かぐや姫さんが月に帰る時に、置き土産に被告人に渡したと聞いています」

弁護人「あなたはその薬をどうしましたか？」

秋田「被告人から頼まれて、静岡県が一番高い山で燃やしてくれと言われたので、その山の山頂まで出向いて、そこで燃やしました」

弁護人「被告人は、なぜそのような事を頼んだのですか？」

秋田「この薬を見ると、かぐや姫を思い出して辛い、と言っていました」

弁護人「あなたはそれを聞いてどう思いましたか？」

秋田「かぐや姫さんの好意とも言える薬を、本当に燃やしていいのか気になったので、何度も聞き直しましたが、答えは一緒でした」

弁護人「質問を変えますが、日頃、被告人のかぐや姫さんへの対応の様子はどうでしたか？」

秋田「被告人は食事、衣服などを十分にそろえて、大変可愛がっていたように見えました」

弁護人「ありがとうございました。弁護人からは以上です」

裁判長「それでは検察官、反対尋問はありますか」

検察官「先ほど、あなたは、被告人とは古くからの付き合いだと言っていました
が、かぐや姫さんが連れて来られる前からの知り合いでしたか？」

秋田「はい」

検察官「では、かぐや姫さんが来る前と後とで、被告人の家の様子で何か変わったことはありましたか？」

秋田「かぐや姫さんが来る以前は、小さな家屋でしたが、来てから以後は、少しずつ立派な屋敷となっていました。多くの人を呼んで宴会もたびたび開かれていました」

検察官「検察官からは以上です」

裁判長「裁判所からお尋ねします。かぐや姫さんには食事、衣服が十分に与えられていたということですが、その費用の出所についてご存じですか？」

秋田「知りません」

裁判長「かぐや姫さんが来る前後で、被告人の仕事が忙しくなった様子などありましたか」

秋田「被告人とは定期的に会っていましたが、特別忙しくなったという話は聞いていないです」

裁判長「わかりました、証人は下がっていただいて結構です」

被告人質問

裁判長「これから被告人質問をします。被告人は、前に立ってください」

被告人、証言台の前に立つ。

裁判長「まず弁護人からどうぞ」

弁護人「竹藪で、かぐや姫さんを見つけた時の様子を教えてください」

被告人「私以外に誰も立ち入ることのない竹藪の中で、一人で居ました。このままでは生命の危険があると思いました」

弁護人「それで、かぐや姫さんを救助しようと思ったのですか？」

被告人「はい、そうです」

弁護人「小判を見つけたときの様子を教えてください」

被告人「かぐや姫を見つけてから、毎週月曜日になるとその場所にきっちりと30枚ずつ小判が置いてありました」

弁護人「それで誰かが、意図的に置いたと思ったのですか？」

被告人「はい、そうです」

弁護人「以上です」

裁判長「検察官からありますか」

検察官「あなたは、小判は養育費だと言っていますが、実際に誰か養育を依頼してきた人がいたのですか？」

被告人「……いいえ。ですが、小判は、時間的にも場所的にも養育費以外に考えられません」

検察官「質問を変えます。あなたは、かぐや姫さんを養育していたと主張しながら、月の使者がかぐや姫さんを迎えに来た時には引き渡すまいとして、高野さんたちまで巻き込んで妨害しようとしています、矛盾していませんか？」

被告人「確かに私はかぐや姫を月へ返したくありませんでした。でもそれも養育者として、かぐや姫の幸せを思っただけのことです」

検察官「彼女にとっては親元に居ることが幸せなことではありませんか？」

被告人「そうは思いません。満月が近づくとつれかぐや姫は月を見て激しく泣くようになりました。また、事情はどうあれ彼らはかぐや姫を遺棄したので、月へ帰ってもひどい扱いを受けるのではと危惧したのです」

検察官「最後に、かぐや姫さんからもらった薬を燃やさせたとのことですが、それは自分にとって不都合な証拠の隠滅を図ったのではないですか」

被告人「違います。あの子のいない世界で不老不死になっても意味がないし、薬を見るたびにかぐや姫を思い出しひどく落ち込んでしまうので、燃やしてもらったのです」

検察官「以上です」

裁判長「帝に高野さんら兵の一団の派遣を依頼する際に、あなたはかぐや姫さんのことをどんな風に説明しましたか？」

被告人「かぐや姫のことはとくに何も言いませんでした。ただ家に何者かの侵略者が来るかもしれないので自宅の警備をしてほしい、ということをお願いしました」

裁判長「かぐや姫さん自身のことは言わなかったのですね？」

被告人「はい」

裁判長「被告人は元の席に戻ってください」

被告人、元の席に着く。

論告・求刑、最終弁論、最終陳述

裁判長「検察官、論告・求刑を行ってください」

検察官「被告人は意思表示も十分にできない生後3か月のかぐや姫を竹藪の中で見つけました。被害者の器量の良いことに気づいた被告人は、被害者が竹の中で安全に生存していたにもかかわらず、かぐや姫を結婚させることで公達と姻戚関係を結ぼうと企て、自宅に連れ帰り自己の支配下に置きました。さらにその後、失敗に終わりましたが、被害者かぐや姫を月の使者が連れ帰る際にも妨害を企てています。また、竹藪の中で拾得した小判についても、明示的に持ち主からの依頼がないにもかかわらず、勝手に養育費と決めつけ、しかし実際にはこれを家の改築や宴会費用に充てるなどして横領しています。さらに、被告人は、不老不死という地球上にはない貴重な薬剤につい

でも平気で焼却処分して、本件一連の犯行につき証拠隠滅を図ろうとしています。以上のことは、検察官提出の各書面・証人から十分に立証できています。相当法条適用のうえ、被告人に対し、懲役3年、及び小判90枚の価額2250万円の追徴を請求します」

裁判長「弁護人、最終弁論を行ってください」

弁護人「のちに月の使者が関与していたことが明らかになりますが、被告人は竹藪の中で1人だけで所在しているかぐや姫を発見しました。現場は、発見当時およそ被告人の他には何人も立ち入る可能性がなく、被告人のみがいわば排他的かつ定期的に立ち入っている竹藪です。その場所にかぐや姫が所在していることを知りながら、自分がこれを放置したままにいることは他の者による救助の可能性もない以上、場合によっては被告人自身にむしろ遺棄罪を構成する可能性すらあります。同女の身を案じた被告人が自宅に連れ帰ることは、救助・保護の目的であったというべきで、このことは、小判を同女の養育費用に充てていることから明らかなです。被告人の行為は人道的見地からも称賛される行為であり、ましてや犯罪であろうはずがありません。被告人は無罪です」

裁判長「被告人は前に立ってください」

被告人、証言台の前に立つ。

裁判長「最後に何か言っておきたいことはありますか」

被告人「今でも月を見るたびに、かぐや姫を思い出します。元気で暮らしているかどうか、それだけが気がかりです」

裁判長「以上ですか」

被告人「はい」

裁判長「それではこれで結審とします。次回公判は、判決を言い渡します。期日は8月7日、10時30分（14時）としたいと思います。弁護人、検察官よ

ろしいでしょうか」

弁護人「はい」

検察官「はい」

裁判長「それでは被告人は、8月7日10時30分(14時)、出廷してください」

(了)

起訴状

2021 年 6 月 11 日

九州国際大学地方裁判所 京都支部 御中

九州国際大学地方検察庁 京都支部
検察官検事 うさぎ

下記被告事件につき公訴を提起する。

記

本籍：京都府 竹取市 長岡 784 番地
住所：本籍に同じ
職業：竹細工職人

(在宅) 竹取の翁 こと 讃岐の造
770 年 7 月 7 日生

公訴事実

被告人は、

第 1, 2019 年 4 月 15 日午後 3 時頃, 京都府 竹取市 長岡 161 番地先の山中の竹藪において, 一筋の光る竹の中からかぐや姫(生後 3 箇月)を発見し, 同女を知人の公達と結婚させる目的で略取し, 自宅に連れ帰り自己の実力支配の下に置き,

第 2, 同年 4 月 22 日午後 2 時頃, 同 29 日午後 1 時頃及び 5 月 6 日午後 3 時頃の計 3 回にわたり, いずれも同竹藪において, 各々小判 30 枚(時価約 750 万円相当)ずつ, 合計 90 枚(時価総額約 2250 万円相当)を竹の中から発見し, これを自分の物にするつもりで拾得して横領したものである。

罪名及び罰条

- | | | |
|-----|---------|-----------|
| 第 1 | 営利目的等略取 | 刑法第 225 条 |
| 第 2 | 遺失物等横領 | 同第 254 条 |

冒頭陳述書

九州国際大学地方裁判所 京都支部 御中

2021年6月18日

被告人 営利目的等略取 遺失物等横領

竹取の翁 おきな こと 讃岐の造 みやつこ

九州国際大学地方検察庁 京都支部

検察官検事 うさぎ

検察官が証拠により証明しようとする事実は、下記の通りである。

記

第一 被告人の身上・経歴

被告人は、770年7月7日、京都府竹取市長岡784番地に讃岐うどんとその妻そうめんの長男として出生し、成人後は独立して竹細工職人として生計を立てるなか、794年、小豆島おりいぶと婚姻したが、同女との間に子をもけることはなく、本件犯行までは夫婦2人のみの生活であった。

第二 本件犯行に至る経緯及び状況

一 被告人は、日常的に、野山にまじりて竹を取りつつよろづのことに使用しては、竹かごやザルなどの竹製品を生産し、これらを売却して生計を立てていたところ、2019年4月15日午後3時頃、自宅付近の山中の竹藪で、一筋の光る竹を発見するに至り、不思議に思っ近づき、竹を割ってみたところ、背丈約10センチメートルの本件被害者乳児(生後3箇月)(以下、かぐや姫という。)が居ることを認めた。

二 被告人は、不思議なこともあるものだと思いながらも、かぐや姫がきわめて器量がよいことに驚き、同女を知り合いの公達と結婚させて姻戚関係を持てば自らも裕福になれるものと考え、同女を結婚の目的で略取し自宅に連れ帰り自己の支配下に置いた。

三 被告人は、その後も竹の採集のために野山に入っていたところ、同22日、29日及び5

月 6 日の 3 週間にわたり、いずれも同女を略取した現場付近において、それぞれ小判 30 枚ずつ計 90 枚を発見し、これを自分の物にするつもりで拾得して横領した。

第三 本件犯行後の状況

一 被告人は、かぐや姫を自己の支配下に置く中、同女の成長の早さに驚いていたが、器量のよいことが周囲の評判となり、多くの男性たちが一目見ようと大挙して自宅を訪れるようになるや、当初の目論見の通り、かぐや姫に対して結婚話を持ち掛けた。当初、同女はこれを拒んでいたものの、被告人の再三にわたる申し入れに対してついに同女自身が提示する条件を満たす者であれば、結婚相手となってもよい旨同女が承諾したので、公達 5 人の中から結婚相手を選択するよう迫った。

二 被告人は、公達 5 人がいずれもかぐや姫の提示した条件を偽装して成就していたことから、当初の結婚目的を達成できないままであったが、次第に同女が月夜の晩に空を見ては悲しんでいる様子を目撃するようになり、また、同女からいずれ月から保護監督者の迎えの者が来る旨の説明があったため、このままでは同女が自己の支配下から離脱してしまうと考え、同女の解放を妨害すべく自宅付近の警備にあたらせる名目で、情を知らない帝をしてちゅうじょうたかののおおくに中將 高野 大国 を長とする兵の一团を自宅付近に派遣させた。

三 被告人は、2020 年 8 月 15 日午後 7 時 30 分頃、月からの使者がかぐや姫の解放を迫る中、あらかじめ自宅付近に配置させていた兵の一团をしてこれを妨害しようとしたが、その目的を遂げなかった。

第四 情状

被告人は、かぐや姫が月の保護監督者のもとに帰ったのちも犯行への反省、悔悟の念を示すこともなく、また、同女から譲り受けたとされる不老不死の薬を焼却して証拠隠滅を図るなど、情状は悪質である。

以上

令和3年(わ)第125号

被告人 讃岐のみやつこ

弁論要旨

九州国際大学地方裁判所 京都支部 御中

2021年6月25日

弁護人 たぬき

第一 基本的主張

本件は、被告人が自宅付近山中の竹藪で発見したかぐや姫が一人で竹の中にいるのを不憫に思い、その身を案じて自宅に連れ帰ったに過ぎず、また、発見した小判は同女を養育するための監護者からの費用であるとの認識のもとで拾得したものであるから、営利目的等略取及び遺失物等横領のいずれについても、被告人は無罪である。

第二 かぐや姫を発見・養育していた事情について

一 被告人は、行きつけの山中の竹藪で竹採集の作業途中、偶然かぐや姫を発見した。日ごろから付近は人が立ち入ることもなく、生後3カ月の乳児が一人で所在しているのは明らかに不自然であることから、被告人は、同女が何者かによって遺棄されたものと考え、保護・救助すべく連れ帰った。

二 被告人は、家に連れ帰ったかぐや姫の世話をしているうち、同女が数日の間に成長してきたことから、通常の人間ではないかもしれないと思うに至り、なお一層、自分が何者かから同女の世話をすべき者としての責任があるとの認識を強くした。

三 かぐや姫はきわめて器量が良く、多くの貴公子から求婚されることもしばしばであり、一方で被告人は自ら年老いていくばかりで自分の死後に残される同女が心配になり、この際、同女を結婚させることが望ましいと考えるに至った。

第三 発見した小判を拾得・費消した事情について

被告人は、竹藪で同女を救助・保護した日の翌週4月22日から3回にわたり、定期的かつ定額30枚ずつの小判を発見するに至った。被告人は、これらをかぐや姫を遺棄した監護者からのいわば養育費であると考え、拾得し、かぐや姫の養育費用に充てた。

第四 結論

およそ被告人の他には何人も立ち入る可能性がなく、被告人のみが定期的に立ち入っている竹藪にかぐや姫が所在していることを知りながら、これを放置したままにいることはむしろ遺棄罪を構成する可能性すらある。また、そうでなかったとしても、同女の身を案じた被告人が同女を自宅に連れ帰ることは、保護監督者に代わる救助・保護行為というべきで、このことは、被告人が小判を同女の養育費用に充てていることから明らかである。被告人の行為は人道的見地からも称賛される行為であり、ましてや犯罪であろうはずがない。被告人は無罪である。

以上



写真 1

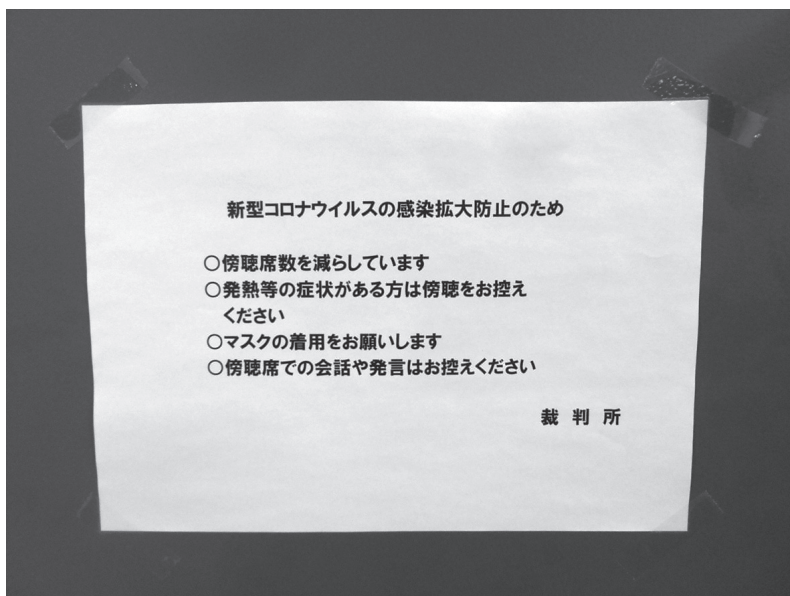


写真 2

写真1 昨今の実際の裁判所では、コロナ対策のために傍聴席の入口に注意書きが掲出されるようになったので、本学の法廷教室でも同様に掲出した。

写真2 同掲出物拡大。本学最寄りの福岡地裁小倉支部と同様の文言・レイアウトで作成したもの。